

シューベルトのピアノ作品

ピアノ・ソナタ 第13番

この愛らしいソナタは作曲年代がはっきりしないが、1819年の作という説が有力（1825年という説もある）。上部オーストリア・シュタイアの旅先で知った若い娘ヨゼフィーネのために書かれたと言われており、いかにもそれらしい愛情あふれる曲調となっている。同じ調性のピアノ・ソナタ第20番に比して「イ長調の小ソナタ」とも呼ばれている。

第1楽章アレグロ・モデラートは、ただひたすら素朴な調べを愛でるように、終始優美な楽想に包まれている。気持ちの高揚はあるものの、ここではシューベルトの厭世的な側面は顔を見せない。第2楽章アンダンテはシンプルな三部形式で、穏やかな調べのなかにも、楚々とした佇まいが感じられる。ソナタ形式の第3楽章アレグロは、軽やかに音階を駆け下りるような第1主題に対し、第2主題は落ち着いた歩調で現れ、展開部では16分音符が駆けめぐり、目まぐるしく転調を繰り返しながら華々しいフィナーレへと至る。

3つのピアノ曲（即興曲）

本曲は、ブラームスが半ば忘れ去られていたシューベルトの遺産のなかから掘り起こして出版したもので、シューベルトが世を去る1828年の作。シューベルトもベートーヴェンが掲げた理想を受け継いだ、その独自性は転調を重ねながら主題を変形させていく手法にあった。近年、シューベルトの音楽と新ウィーン楽派の音楽を並置して取り上げる演奏家が増えてきたのも、そうした変形の手法にある種の共通性が見出せるからだろう。作品は、第1曲アレグロ・アッサイ（変ホ短調）、第2曲アレグレット（変ホ長調）、第3曲アレグロ（ハ長調）という構成で、いずれも複合三部形式（ロンド形式）を採っている。

ピアノ・ソナタ 第18番

1826年に1曲だけ書かれた作品。1827年、本曲は4つの小品として楽譜が出版され、第1曲（第1楽章）は「幻想曲」とされた。そのため、ピアノ・ソナタとして扱われるようになってからも《幻想》という副題で呼ばれることもある。最晩年の3つのピアノ・ソナタへの扉を開く作品として位置づけられ、シューマンは「形式的にも精神的にも完璧」と絶賛した。

第1楽章モルト・モデラート・エ・カンタービレは、厳かな雰囲気さえ漂う冒頭の第1主題から夢見るシューベルトが全開。そこに軽やかに舞うような第2主題のメロディが現れる。第2楽章アンダンテは、暖かく穏やかな主題で始まり、変奏が加えられてロンド風の形式になっている。第3楽章メヌエットの主部は、メヌエットというより骨太なレントラー調の舞曲に近い。対照的にトリオは、繊細な美しさを放っている。第4楽章アレグレットは明確なロンド形式で、用いられる主題はどこか親しげで懐かしさを感じさせるが、そこに時折、憂愁の影が差す。そして最後に別れを惜しむかのようにその主題が奏でられる。